

## 6章

### 自然資源の継承と形成

キャンパスの快適性や景観を向上させるためには、緑地等（植栽、並木、樹林地など）を、一体的、統一的な考え方のもとに、かつ継続的に、整備・維持管理することが必要である。2011（平成23）年には、「大阪大学緑のフレームワークプラン」が策定された（そのスタートラインは2005（平成17）年版キャンパスマスタープラン6章が元となっている）。またその後、緑のフレームワークプランは2018年度に部分改訂を行っている。広域におけるキャンパス緑地の位置づけや、生物多様性の重要性を確認しつつ、緑地および広場や街路等の緑の整備と維持管理の方針をまとめているので、詳細はそちらを参照されたい。

#### 6.1 全体の緑のコンセプト

本学のキャンパスにおける緑地等の現況と、キャンパスを取り巻く広域の視点から、全体の考え方を以下のように整理している。

- 北摂地域全体におけるキャンパス緑地の位置づけと、守るべき各キャンパスの良い点を明示する
- 維持管理（剪定や除草）から整備（工事）までを通じた視点を設定する
- 生物の多様性や希少種についても配慮する
- 周辺自治体や地元、学生教職員との連携を進める

また、教育・研究環境の基盤となる緑として、豊かな自然、活発な交流、健全な活動を実現する屋外空間が、教育と研究の源泉となることを目指している。

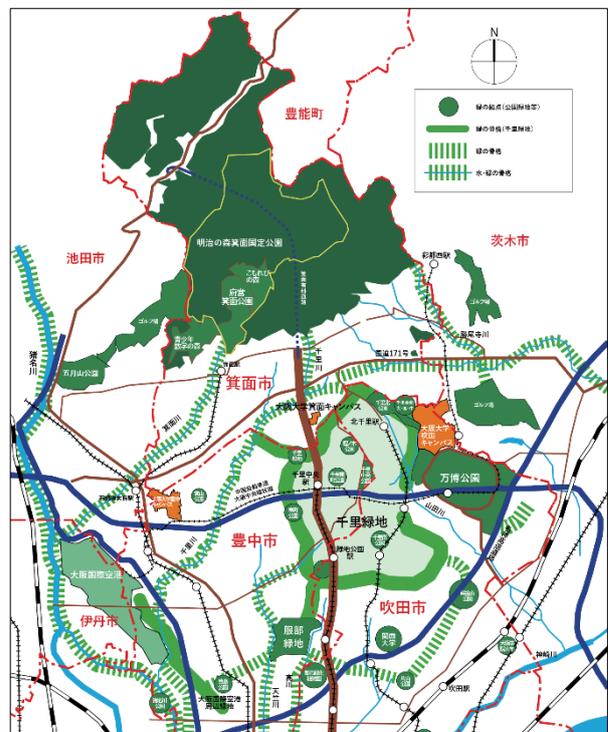


図 6.01 キャンパスを取り巻く広域の水と緑のネットワーク

## 6.2 各キャンパスの考え方

各キャンパスの関係性は図 6.02 のように整理できる。それぞれの特徴と自然資源の継承と形成に必要な考え方を、以下に概説する。

### (1) 豊中キャンパス

豊中キャンパスは全般に、剪定や間引きの行き届いていない過密な緑地が多い。またササやタケに侵食されて、生物の多様性を失いつつある部分もある。防犯上も見通しのよさは有効である。全体として密度を減らしながら、風や視線の通りがよい空間を形成してゆく必要がある。

加えて、ここ数年の研究・調査によりキャンパス内に多数の希少な動植物の存在が明らかになってきている。それらエリアごとに生物多様性の保全にもより配慮していく必要がある。

特徴的なイチョウ並木の黄色や、サクラなどの色合いを大切にしながら、一年草や、池にあっては水生植物なども取り入れて、季節感や色合いがより豊かなキャンパスを目指してゆく。

周辺地域と調和のとれた都市の中の緑

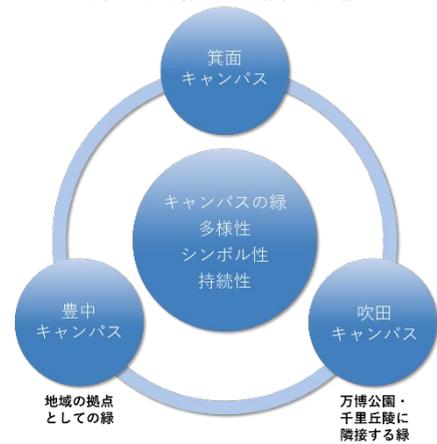
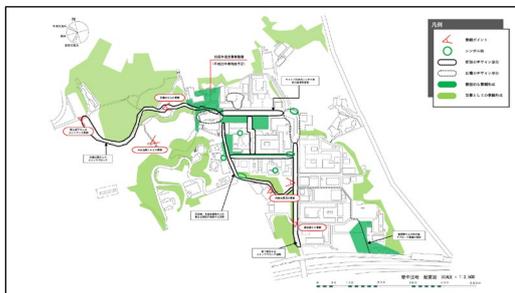
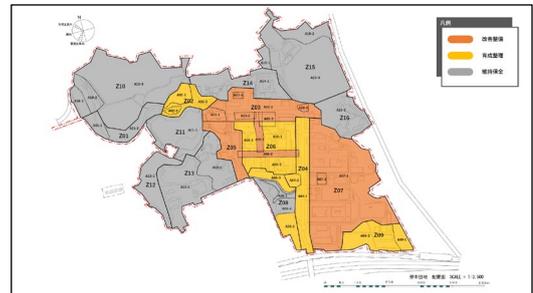


図 6.02 各キャンパスの緑のコンセプト



緑のフレームワークプラン 2 章  
緑の現状分析(豊中)



緑のフレームワークプラン 4 章  
エリアごとの整備と維持管理の方針(豊中)

図 6.03a 緑のフレームワークプランにおける豊中キャンパスの考え方

## (2) 吹田キャンパス

吹田キャンパスは広大である。キャンパス内での緑の量と質のバランスに鑑みて、広域の緑との「生態回廊としての連続性」に配慮したものとする必要がある。その中で、豊中キャンパスと同様に、ササやタケの侵食をできるだけ限定的な範囲にとどめて行かなければならない（意匠上、部分限定的にササやタケを植栽として用いることはありうる）。

また、吹田キャンパスはサクラ、ケヤキ、クス、ポプラなどの並木が樹木のトンネルを構成し、街路景観の重要な要素となっている部分が多い。

なお、除草によって夏以降に開花する植物もあるので、今後吹田キャンパスに限らず、このような保護すべき植物を特定しながら、それらの開花時期に配慮して除草時期を調整することが望ましい。

吹田キャンパスでは、その広さと幹線街路によって形成されている空間の特徴から、図 6.03b に示すように通り系とエリア系に分けた分析と方針設定を行っている。

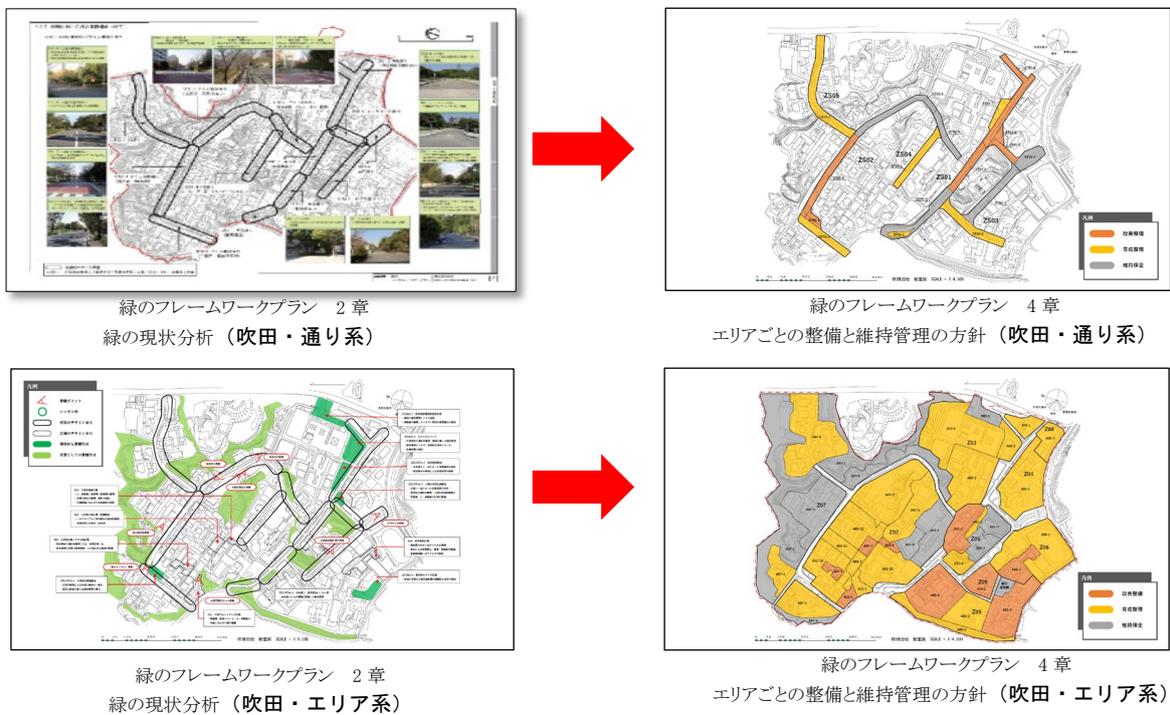


図 6.03b 緑のフレームワークプランにおける吹田キャンパスの考え方

### (3) 箕面キャンパス

箕面キャンパスは敷地面積 8,000 m<sup>2</sup>の駅前都市型キャンパスである。敷地面積が豊中・吹田と異なり小規模であること、また一気に開発を進めることになったため、計画段階から細かな緑地計画を立てて整備を行ってきた。

キャンパス北側には箕面キャンパスのシンボルとなる並木道を整備した。また、1F の大阪外国語大学記念ホールのための鑑賞庭として坪庭を整備した。その他に、シンボル広場として外国学研究講義棟と学寮の間に芝生の広場を整備した。これら以外にも、デッキ上も含めキャンパス内はウォークアビリティを考慮しながら積極的に緑化を行いゆとりと潤いのあるキャンパスとしている。今後は下位指針である緑のフレームワークプランに基づき維持管理を継続的に行い長期的な視点で施設環境を整備するとともに、立地エリアにおいて大阪船場繊維卸商団地協同組合が「【COM GARDEN CITY】構想」を計画されていることから、これらと連携したエリアとしての緑化を推進していく。

## 6.3 埋蔵文化財について

豊中キャンパスはキャンパス全体が待兼山遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されており、1985年に埋蔵文化財調査委員会が発足以後、埋蔵文化財調査室がキャンパス内の文化財保護と建物計画などの調整を行い、キャンパス内の遺跡の調査を続けてきている。埋蔵文化財包蔵地は豊中キャンパスだけではなく吹田キャンパスの中にも山田丘遺跡の存在が判明している。キャンパス計画検討時にはこれらも十分に配慮して計画を進める必要がある。

埋蔵文化財は緑と同じくその土地の過去からの記憶・個性を示し、キャンパスの魅力を高める重要な要素の一つである。今後は建物計画時のみならず、キャンパス内のウォークアビリティを高める中で、調査結果を活用した歩行空間の整備等も検討していく。



図 6.04 埋蔵文化財調査室の年報(表紙)